

# 第二菑蕪本

泉鏡花

青空文庫



雪の夜路よみちの、人影もない真白まっしろな中を、矢来の奥の男世帯へ出先から帰った目に、狭い二階の六畳敷、机の傍わきなる置炬燵おきこたつに、肩まで入って待っていたのが、するりと起直った、逢いに来た婦おんなの一重々々、燃立つような長襦袢ながじゆばんばかりだった姿は、思い懸けずもまた類たぐいなく美しいものであつた。

膚はだを蔽おほうに紅くれなゐのみで、人の家に澄まし振ふり。長年連添つて、気心も、羽織も、帯も打解けたものにだつてちよつとあるまい。

世間も構わず傍若無人、と思わねばならないのに、俊吉は別に怪あやしまなかつた。それは、懐しい、恋しい情が昂あがつて、路々の雪礫ゆきつぶてに目が眩くらんだ次第ではない。

——逢いに来た——と報知しらせを聞いて、同じ牛込、北町の友達の家うちから、番傘を傾け傾け、雪を凌しのいで帰る途中も、その婦おんなを思うと、鎖とぎした町家まちやの隙間洩もる、仄ほのかな燈火あかりよりも颯さつと濃い緋ひの色を、酒井の屋敷の森越に、ちらちらと浮いつ沈みつ、幻のように視みたのであるから。

当夜は、北町の友達のその座敷に、五人ばかりの知己が集つて、袋廻しの運座があつた。雪を当込んだ催ではなかつたけれども、黄昏が白くなつて、さて小留みもなく降り頻る。戸外の寂寞しいほど燈の興は湧いて、血氣の連中、借錢ばかりにして女房なし、河豚も鉄砲も、持つて来い。……勢はさりながら、もの凄いくらい庭の雨戸を圧して、ばさばさ鉢前の南天まで押寄せた敵に対して、驚破や、蒐れと、木戸を開いて切つて出づべき矢種はないので、逸雄の面々齒齧をしながら、ひたすら籠城の軍議一決。

そのつもりで、——千破矢の雨滴という用意は無い——水の手の爛徳利も宵からは傾けず。追加の雪の題が、一つ増しただけ互選のおくれた初夜過ぎに、はじめて約束の酒となつた。が、筆のついでに、座中の各自が、好、悪、その季節、花の名、声、人、鳥、虫などを書きしるして、揃つた処で、一……何某……好きなものは、美人。

「遠慮は要らないよ。」

悪むものは毛虫、と高らかに読上げよう、という事になる。

箇条の中に、最好、としたのがある。

「この最好というのは。」

「当人が何より、いい事、嬉しい事、好きな事を引くるめてちよつと金麴羅にして頬張るん

だ。」

その標目みだしの下へ、何よりも先に「待きた人来る」と……姓を吉岡と云う俊吉が書込んだ時であつた。

襖ふすまをすうと開けて、当家の女中が、

「吉岡さん、お宅からお使つかいでございます。」

「内から……」

「へい、女中さんがお見えなさいました。」

「何てつて？」

「ちよつと、顔をツて、お玄関にお待ちでございます。」

「何だろう。」と俊吉はフトものを深く考えさせられたのである。

お互に用の有りそうな連中は、大概この座に居合こたわす。出先へこうした急使の覚えはいささかもないので、急な病氣としより、と老人としよりを持つ胸にこたへた。

「敵の間諜まわしものじゃないか。」と座の右に居て、猪口ちよくを持ちながら、膝の上で、箇条を拾つていた当家の主人が、ト俯向うつむいたままで云つた。

「まさか。」

と<sup>みまわ</sup>すと、ずらりと車座が残らず顔を見た時、燈<sup>あかり</sup>の色が颯<sup>さつ</sup>と白く、雪が降込んだように俊吉の目に映った。

## 二

「ちよつと、失礼する。」

で、引返して行く女中のあとへついて、出しなに、真<sup>ま</sup>中<sup>なか</sup>の襖<sup>ふすま</sup>を閉める、と降<sup>ふり</sup>積<sup>つも</sup>る雪の夜<sup>よ</sup>は、一重<sup>ひとえ</sup>の隔<sup>へだて</sup>も音が沈んで、酒の座は摺<sup>すり</sup>退いたように、ずつと遠くなる……風の寒い、冷い縁側を、するする通つて、来<sup>き</sup>馴<sup>な</sup>れた家<sup>うち</sup>で戸惑いもせず、暗がりの座敷を一間、壁際を抜けると、次が玄関。

取次いだ女中は、もう台所へ出て、鍋<sup>なべ</sup>を上る湯気<sup>ゆき</sup>の影。

そこから彗<sup>ほうきぼし</sup>星<sup>せい</sup>のような燈<sup>あかり</sup>の末が、半ば開けかけた襖<sup>ふすま</sup>越<sup>ほのか</sup>、仄<sup>ほのか</sup>に玄関の畳へさす、と見ると、沓<sup>くつ</sup>脱<sup>ぬぎ</sup>の三和土<sup>さんわど</sup>を間<sup>あい</sup>に、暗い格子戸にぴたりと附着<sup>くっつく</sup>いて、横向きに立っていたのは、俊吉の世帯<sup>としま</sup>に年増<sup>としま</sup>の女中で。

二月ばかり給金の借<sup>かり</sup>のあるのが、同じく三月ほど滞<sup>とど</sup>つた、差配<sup>さばい</sup>で借りた屋号の黒い提<sup>ちよう</sup>提<sup>ちよう</sup>

灯ちんを袖に引着けて待設ける。が、この提灯を貸したほどなら、夜中に店立たなだてをくわせもしまい。

「おい、……何だ、何だ。」と框かまちまで。

「あ、旦那様。」

と小腰を屈かがめたが、向直つて、

「ちよつと、どうぞ。」と沈めて云う。

余り要ありそうなのに、急せき心に声が苛立いらだつて、

「入れよ、こつちへ。」

「傘も何も、あの、雪で一杯でございますから。皆様のお穿はきものが、」

成程、暴風雨あらしの舟が遁にげ込んださながらの下駄の並び方。雪が落ちると台なしという遠慮であろう。

「それに、……あの、ちよつとどうぞ。」

「何だよ。」とまだ強く言いながら、俊吉は、台所から燈あかりの透く、その正面の襖を閉めた。真暗まっくらになる土間の其方そなたに、雪の袖なる提灯一つ、夜を遥はるかな思おもいがする。

勞ねぎらい心で、

「そんなに、降るのか。」とiiiiい土間へ。

「もう、貴方<sup>あなた</sup>、足駄<sup>あしだ</sup>が沈みますほどでございます。」

聞きも果てずに格子に着いて、

「何だ。」

「お客様でございまして。」と少し顔を退<sup>ど</sup>けながら、せいせい云う……道を急いだ呼吸<sup>いき</sup>づかい、提灯の灯の額際が、汗ばむばかり、てらてらとして赤い。

「誰だ。」

「あの、宮本様とおっしゃいます。」

「宮本……どんな男だ。」

時に、傘<sup>からかさ</sup>を横にはずす、とバサリという、片手に提灯を持直すと、雪がちらちらと軒を潜<sup>くぐ</sup>った。

「いいえ、御婦人の方でいらつしやいます。」

「おんな  
婦<sup>おんな</sup>か？」

「はい。」

「婦だ……待ってるのか。」



「ええ、是非お目にかかりとうございますつて。」

「はてな、……」

とのみで、俊吉はちよつと黙つた。

女中は、その太つた軀からだを揉もみこなすように、も一つ腰かたを屈かがめながら、

「それに、あの、お出先へお迎むかひに行くのなら、御朋輩ごほうばいの方に、御自分の事をお知らせ申まうさないように、内証ないしよでと、くれぐれも、お託ことづけでございましたものですから。」

「変だな、おかしいな、どこのものだか言つたかい。」

「ええ、御遠方。」

「遠い処か。」

「深川からとおっしゃいました。」

「ああ、襟巻なんか取らんでも可いい。……お帰り。」

女中はポカンとして膨れた手袋の手を、提灯の柄ごと唇へ当てて、

「どういたしましょう。」

「……可よし、直ぐ帰る。」

座敷に引返ひっかえそうとして、かたりと土間の下駄を踏んだが、ちよつと留まつて、

「どんな風采ふうさいをしている。」と声を密ひそめると。

「あの真紅まつかなお襦袢じゆばんで、お跣足はだしで。」

## 三

「第一、それが目に着いたんだ、夜だし、……雪が白いから。」

俊吉は、外套がいとうも無しに、番傘で、帰途かえりを急ぐ中に、雪で足許あしもとも辿々たどたどしいに附けても、心も空も真白まつしろに跣足はだしというのが身に染みる。

——しかし可訝おかしい、いや可訝おかしくはない、けれども妙だ、——あの時、そうだ、久しぶりに逢つて、その逢つたのが、その晩ぎり……またわかれになった。——しかもあの時、思いがけない、うっかりした仕損しそこないで、あの、お染そめの、あの体からだに、胸から膝へ血を浴びせるようなことをした。——

みまわ  
せば、我が袖も、他の垣根ひとも雪である。

——去年の夏、たしか八月の末と思う、——  
その事のあつた時、お染は白地明石あかしに藍あいで子持縞こもちまの羅うすものを着ていたから、場所と云い、

境遇も、年増の身で、小さな芸妓屋に丸抱えという、可哀な流にしがらみを掛けた袖も、花に、もみじに、霜にさえその時々の色を染める。九月と云えば、暗いのも、明いのも、そこいら、……御神燈並に、細なり、お召なり単衣に衣更える筈。……しよぼしよぼ雨で涼しかったが葉月の声を聞く前だった。それに、浅草へ出勤で、お染はまだ間もなかった頃で、どこにも馴染は無いらしく、連立って行く先を、内証で、抱主の蔦家の女房とひそひそ囁いて、その指図に任かせた始末。

披露の日は、目も眩むように暑かったと云った。

主人が主人で、出先に余り数はなし、母衣を掛けて護謨輪を軋らせるほど、光った御茶屋には得意もないので、洋傘をさして、抱主がついて、細かく、せつせと近所の待合小料理屋を刻んで廻った。

「かさかさして、えんえんえん、という形なの、泣かないばかりですわ。私もう、嬰兒に生れかわった気になったんですけれど、情ないってなかったわ。

その洋傘だつて、お前さん、新規な涼しいんじゃないでしょう。旅で田舎を持ち歩いた、黄色い汚点だらけなんじゃありませんか。

そしてどうです、長襦袢たら、まあ、やっぱりこれですもの。」

と包ましかに、薄藤色の半襟を、面瘦おもやせた、が、色の白い顚おとがいでおさえて云う。

その時、小雨の夜の路地裏の待合で、述懐しつつ、恥らったのが、夕顔の面影ならず、  
膚はだえを包んだ紅くれないであつた。

「……この土地じや、これでないと不可いけないんだって、主人が是非と云いますもの、出の衣裳だから仕方がない。

それで、白足袋でお練ねりでしょう。もう五にもなつて真白まっしろでしょう、顔はむらになる……奥山相当で、煤すすけた行燈あんどんの影へ横向きに手を支ついて、肩で挨拶あいさつをして出るんなら可いけれど、それだつて凄すごいわね。

真昼間まっぴるまでしょう、遣切やりきれたもんじやありやしない。

冷汗せせりだわ、お前さん、かんかん炎天に照附てのひらけられるのと一所で、洋傘かさを持つた手がすべるんですもの、掌てのひらから、」

と二の腕が衝つと白く、且つ白麻の手巾ハンケチで、ト肩をおさえて、熟じつと見た瞼まぶたの白露。

——俊吉は、雪の屋敷町の中ほどで、ただ一人。……肩袖をはたはたと払つた。……払えば、ちらちらと散る、が、夜目にも消えはせず、なお白しら々とおもかだとだ立たつ。

## 四

「この、お前さん手巾ハンケチでさ、洋傘かさの柄を、しっかりと握って歩行あるしましたんですよ。

あとへ跟ついて来る女房おかみさんの風俗ふうツたら、御覧ごらんなさいなね。人の事を云えた義理じやないけれど、私よりか塗立ぬだてって、しよろしよろ裾長すそながか何かで、鬢びんをべったりと出して、黒い目を光らかにして、おまけに腕まくりで、まるで、売うますの口上言いだわね。

察さして下さいな。」

と遣瀨やるせなげに、眉をせめて俯目ふしめになったと思うと、まだその上に——氣障きざじやありませんか、駈出かけだしの女形がハイカラ娘の演するように——と洋傘かさを持った風采なりを自ら嘲あざわつた、その手巾ハンケチを顔に当てて、水髪しのぶや葱しづくの雫、縁に風りんのチリリンと鳴る時、芸妓島田げいこを俯向うつむけに膝つづに突伏つぷした。

その時、待合の女房が、襖ふすま越こに、長火鉢とこの処とこで、声を掛けた。

「染ちゃん、お出ばなが。」

俊吉はこれを聞くと、女の肩に掛けていた手が震えた……染ちゃんと云う年とし紀しではない。遊女つとめあがりの女をと気がさして、なぜか不思議に、女もともに、侮あなどり、輕かろんじ、冷評ひやかされ

たような気がして、悚然として五体を取つて引緊められたまで、極りの悪い思いをしたのであつた。

いわゆる、その（お出ばな）のためであつた、女に血を浴びせるような事の起つたのは。思えば、その女には当夜は云うまでもなく、いつも、いつまでも逢うべきではなかつたのである。

はじめ、無理をして廓を出たため、一度、町の橋は渡つても、潮に落行かねばならない羽目で、千葉へ行つて芸妓になつた。

その土地で、ちよつとした呉服屋に思われたが、若い男が田舎氣質の赫と逆上せた深嵌りで、家も店も潰した果が、女房子を四辻へ打棄つて、無理算段の足抜きで、女を

東京へ連れて遁げると、旅籠住居の気を換える見物の一夜。洲崎の廓へ入つた時、ここの

大籬の女を俺が、と手折つた枝に根を生ず、返咲の色を見せる気にもなつたし、

意気な男で暮したさに、引手茶屋が一軒、不景気で分散して、売物に出たのがあつたのを、届くだけの借金で、とにかく手附ぐらいな処で、話を着けて引受けて稼業をした。

まず引掛の昼夜帯が一つ鳴つてゞ《しま》った姿。わざと短い煙管で、真新しい銅壺に並んで、立膝で吹かしながら、雪の素顔で、廓をちらつく影法師を見て思出したか。

——勘定<sup>つけ</sup>をかく、掛<sup>かけ</sup>すずりに袖でかくして参らせ候、——

二年ぶり、打絶えた女の音信<sup>たより</sup>を受取った。けれども俊吉は稼業は何でも、主<sup>ぬし</sup>あるものに、あえて返事もしなかつたのである。

×《しめ》の形や、雁<sup>かり</sup>の翼は勿論、前の前の下宿屋あたりの春秋<sup>はるあき</sup>の空を廻り舞つて、二三度、俊吉の今の住居<sup>すまい</sup>に届いたけれども、疑<sup>うたがい</sup>も嫉妬<sup>いっど</sup>も無い、かえつて、卑怯<sup>ひきよう</sup>だ、と自分<sup>のし</sup>を罵りながらも逢わずに過した。

おぼろおぼろ  
朧<sup>よ</sup>々 夜も過ぎず、廓<sup>さかり</sup>は八重桜の盛<sup>さか</sup>というのに、女が先へ身を隠した。……櫛<sup>くし</sup>巻<sup>まき</sup>が棲白<sup>つましろ</sup>く土手の暗<sup>よ</sup>がり<sup>つ</sup>を忍んで出たろう。

引手茶屋は、ものの半年とも持堪<sup>もちこた</sup>えず、——残った不義理の借金のために、大川を深川<sup>さかさま</sup>から、身を倒<sup>な</sup>に浅草<sup>な</sup>へ流<sup>なが</sup>着<sup>れ</sup>いた。……手切<sup>てぎれ</sup>の髻<sup>かもじ</sup>も中に籠<sup>こ</sup>めて、芸妓<sup>げいし</sup>鬘<sup>やまげ</sup>に結<sup>い</sup>った私、千葉の人とは、きれいに分<sup>わけ</sup>をつけ参らせ候<sup>そろ</sup>。

……  
そうした手紙を、やがて俊吉が受取ったのは、五重の塔の時<sup>ほととぎす</sup>鳥。奥山の青葉頃。……

雪の森、雪の堀、俊吉は辻へ来た。

## 五

八月の末だった、その日、俊吉は一人、向島<sup>むこうじま</sup>の百花園に行った<sup>かえるさ</sup>帰途、三<sup>み</sup>一<sup>め</sup>一<sup>ぐり</sup>のあたりから土手へ颯<sup>さつ</sup>と雲が懸<sup>か</sup>つて、大川が白くなつたので、仲見世前まで腕車<sup>くるま</sup>で来て、あれから電車に乘ろうとしたが、いつもの雑沓<sup>ざつとう</sup>。急な雨の混雑はまた夥<sup>おびただ</sup>しい。江戸中の人を箱<sup>は</sup>詰<sup>づめ</sup>にする体裁<sup>ていたらく</sup>。不見識なのはもちに捏<sup>でっ</sup>ぢられた蠅の形で、窓にも踏台にも、べたべたと手足をあがいて附着<sup>くつつ</sup>く。

電車は見る見る中に黒く幅つたくなつて、三台五台、群衆を押離すがごとく雨に洗い落した<sup>きし</sup>そうに軋<sup>きし</sup>んで出る。それをも厭<sup>いと</sup>わない浅間<sup>いん</sup>しきで、児<sup>こ</sup>を抱いた洋服がやつと手を縋<sup>すが</sup>つて乗掛<sup>のつか</sup>けた処を、鉄棒で払わぬばかり車掌の手で突離された。よろめくと帽子が飛んで、小児<sup>こども</sup>がぎやつと悲鳴を揚げた。

この発奮<sup>はつふみ</sup>に、

「乗るものか。」

濡れるなら濡れろ、で、奮然として駈出<sup>かけだ</sup>したが。

仲見世から本堂までは、もう人気もなく、雨は勝手に降って音も寂寞<sup>ひっそり</sup>としたその中を、



一思いに仁王門も抜けて、御堂の石畳を右へついて廻廊の欄干を三階のように見ながら、  
 廂の頼母しさを親船の舳のように仰いで、沫を避けつつ、吻と息。

濡れた帽子を階段擬宝珠に預けて、瀬多の橋に夕暮れた一人旅という姿で、茫然とし  
 てしばらく待つ。……

風が出て、雨は冷々として小留むらしい。

雫で、不気味さに、まくつていた袖をおろして、しつとりとある襟を掻合す。この陽  
 気なればこそ、蒸暑ければ必定雷鳴が加わるのであった。

早や暮れかかつて、ちらちらと点れる、灯の数ほど、ばらばら誰彼の人通り。

話声がふわふわと浮いて、大屋根から出た蝙蝠のように目前に幾つもちらつくつと、柳  
 も見えて、樹立も見えて、濃く淡く墨になり行く。

朝から内を出て、随分遠路を掛けた男は、不思議に遙々と旅をして、広野の堂に、  
 一人雨宿りをしたような気がして、里懐かしさ、人恋しさに堪えやらぬ。

「訪ねてみようか、この近処だ。」

既に、駈込んで、一呼吸吐いた頃から、降籠められた出前の雨の心細さに、親類か、友  
 達か、浅草辺に番傘一本、と思うと共に、ついそこに、目の前に、路地の出窓から、果敢

ない顔を出して格子に縋<sup>すが</sup>つて、此方<sup>こなた</sup>を差<sup>さ</sup>覗<sup>のぞ</sup>くような気がして、筋骨<sup>すじほね</sup>も、ひしひしと  
めつけられるばかり身に染みた、女の事が……こうした人懐<sup>ま</sup>しさ<sup>さ</sup>にいや増<sup>まさ</sup>る。……  
ここで逢うのは、旅路遥<sup>はるか</sup>な他国<sup>くわ</sup>の廓<sup>わ</sup>で、夜更けて寝乱れた従妹<sup>いとこ</sup>にめぐり合つて、すがり  
寄る、手の緋縮<sup>ひぢりめん</sup>緋は心の通う同じ骨肉の血であるがごとく胸をそそられたのである。

抱えられた家も、勤めの名も、手紙のたよりに聞いて忘れぬ。

「可<sup>よ</sup>し。」

肩を揺<sup>ゆ</sup>つて、一ツ、胸で意気込んで、帽子を俯<sup>うつむ</sup>向けにして、御堂の廂<sup>ひさし</sup>を出た。……

軽い雨で、もう面<sup>おもて</sup>を打つほどではないが、引緊<sup>ひきし</sup>めた袂<sup>たもと</sup>重たく、しよんぼりとして、九十

九折<sup>らおり</sup>なる拔裏、横町。谷のドン底<sup>じぶ</sup>の溝<sup>みち</sup>づたい、次第に暗き奥山路。

## 六

時々足許から、はつと鳥の立つ女の影。……けたたましく、可哀<sup>あわれ</sup>に、心悲<sup>うれ</sup>しい、鳶<sup>とび</sup>に  
とらるると聞く果敢<sup>はか</sup>ない蟬の声に、俊吉は肝を冷しつつ、※々《ばっぱ》と面<sup>おもて</sup>を照らす  
狐火<sup>きつねび</sup>の御神燈に、幾たびか驚いて目を塞<sup>ふさ</sup>いだが、路も坂に沈むばかり。いよいよ谷深く、

水が漆うるしを流した溝どぶばた端に、茨いばらのごとき格子前さき、消えずに目に着く狐火が一つ、ぼんやりとして（蔦屋つたや）とある。

「これだ。」

密と、下へ屈かがむようにしてその御神燈みまわをすと、他に小ほ草おくさの影は無い、染次、と記した一葉ひとはのみ。で、それさえ、もと居たらしい芸妓げいしやの上へ貼はり紙がみをしたのに記してあった。看板かきを書かえる隙ひまもない、まだ出たてだという、新しさより、一人旅の木賃宿に、かよいいた女かみづすまが紙かみづすま衾かみづすまの可哀さが見えた。

とばかりで、俊吉は黙もくつて通過とくぎた。

が、筋向うの格子戸ねずみなきの鼠鳴ねずみなきに、ハツと、むささびが吠ほえたほど驚おどいて引返ひつかえして、蔦屋の門を逆さかに戻かへる。

俯向うつむいてイいたんでまた御神燈のぞを覗のぞいた。が、前刻さつきの雨が降込んで閉めたのか、框かまちの障子は引いてある。……そこに切張きりばりの紙に目隠めかくしされて、あの女が染次か、と思う、胸がドキドキして、また行過いぎる。

トあの鼠鳴がこつちを見た。狐のようで鼻が白い。

俊吉は取とつて返した。また戻かへつて、同じことを四五度たびした。

いいもの望みで、木賃を恥じた外聞ではない。……巡礼の笈おいに国々の名所古跡の入ったほど、いろいろの影について廻った三年ぶりの馴染なじみに逢う、今、現在、ここで逢うのに無事では済むまい、——お互に降つて湧わくような事があるう、と取越苦勞の胸騒むなさわぎがしたのであつた。

「御免。」

と思切つて声を掛けた時、俊吉の手は格子を壓おさえて、そして片足遁構にげがまえで立っていた。  
「今晚は。」

「はい、今晚は。」

と平べつたい、が切口上で、障子を半分開けたのを、孤家ひとつやの婆々ばばあかと思うと、たぼの張つた、脊の低い、年紀としには似ないで、頸くびを塗つた、浴衣の模様も大年増。

これが女房とすぐに知れた。

俊吉は、ト御神燈の灯を避よけて、路地の暗い方へ衝つと身を引く。

おしろい  
白粉おしろいのその頸を、ぬいと出額おでこの下、小慧こさかしげに、世智辛く光る金壺眼かなつばまなこで、じろりと見越して、

「今晚は。誰どなたさま方様で？」

「お宅に染次つてのは居りますか。」

「はい居りますでございませう。」

と立塞たちふさがるように、しかも、遁にがすまいとするように、櫃かまち一杯にはだからのである。

「ちよつとお呼び下さいませんか。」

ああ、来なければ可よかった、奥も無さそうなのに、声を聞いて出て来ないくらいなら、とがつくり泥濘ぬかるみへ落ちた気がする。

「唯ただいま今お湯へ参つてますがね、……まあ、貴方あなた。」と金壺眼はいよいよ光った。

「それじゃまた来ましょう。」

「まあ、貴方。」

風体を見定めたか、慌あわただしく土間へ片足を下ろして、

「直じきに帰りますから、まあ、お上んなさいまし。」

「いや、途中で困つたから傘を借りたいと思つたんですが、もう雨も上りましたよ。」

「あら、貴方、串じょうだん戯ごじゃありません。私が染ちゃんに叱られますわ、お歸し申すもん

ですかよ。」

## 七

「相合傘でいらつしやいまし、染ちゃん、嬉しいでしょう、えへへへへ、貴方、御機嫌よう。」

と送出した。……

傘は、<sup>からかさ</sup>染次が<sup>つま</sup>褌を取つてさしかける。

「<sup>いや</sup>可厭な<sup>かかあ</sup>媽々だな。」

「まだ聞えますよ。」

と下へ、<sup>たもと</sup>袂の先をそつと引く。

それなり四五間、黙つて小雨の路地を<sup>ある</sup>歩行く、……俊吉は少しずつ、……やがて傘の下を離れて出た。

「濡れますよ、貴方。」

男は<sup>だんまり</sup>黙然の腕組して行く。

「ちよつと、濡れるわ、お前さん。」

やっぱり暗い方を、男は、ひそひそ。

「濡れると云うのに、」

手は届く、羽織の袖をぐつと引いて突附けて、傘を傾けて、

「邪慳だねえ。」

「泣いてるのか、何だな、大な姉さんが。」

「……お前さん、可懐しい、恋しいに、年齢に加減はありませんわね。」

「何しろ、お前、……こんな路地端に立つてちや、しようがない。」

「ああ、早く行きましょう。」

と目を蔽うていた袖口をはらりと落すと、瓦斯の遠灯にちらりと翻る。

「少づくりで極りが悪いわね。」

と棲を捌いて取直して、

「極が悪いと云えば、私は今、毛筋立を突張らして、薄化粧は可いけれども、のぼせて湯から帰って来ると、染ちゃんお客様が、ツて女房さんが言ったでしょう。」

内へ来るような馴染はなし、どこの素見だろうと思つて、おやそうか何か気の無い返事をして、手拭を掛けながら台所口から、ひよいと見ると、まあ、お前さんなんだもの。真赤になつたわ。極が悪くつて。」

「なぜだい。」

「悟られやしないかと思つてさ。」

「何を?……」

「だつて、何をツて、お前さん、どこか、お茶屋か、待合からかけてくれれば可いじゃありませんか、唐突に内へなんぞ来るんだもの。」

「三年越だよ、手紙一本が当なんだ。大事な落しものを捜すような気がするからね、どこかにあるには違いないが、居るか居ないか、逢えるかどうか分りやしない。おまけに一向土地不案内で、東西分らずなもの。茶屋の広間にたった一つ膳を控えて、待つていて、そんな妓は居りません。……居ますが遠出だなんぞと来てみたが可い。御存じの融通が利かないんだから、可、ついでにお銚子のおかわりが、と知らない女を呼ぶわけに行かずさ、瀬ぶみをするつもりで、行つたんだ。」

もつともね、居ると分つたら、門口から引返して、どこかで呼ぶんだつけ。娼女が追掛るじゃないか。仕方なし奥へ入つたんだ。一間しかありやしない。すぐの長火鉢の前に娼女は控えた、顔の遣場もなしに、しよびたれておりましたよ、はあ。

光つた旦那じゃなし、飛んだお前の外聞だつけね、済まなかつたよ。」



「あれ、お前さんも性しょうわる悪わるをすると見えて、ひがむ事を覚えたね。誰が外聞だと申しました、俊さん、」

取った袂に力が入って、

「女房おかみさんに、悟られると、……だと悟られると、これから逢うのに、一々、勘定が要るじゃありませんか。おまいりだわ、お稽古だわって内証ないしよで逢うのに出憎いわ。

はじめの事は知ってるから私の年が年ですからね。主人の方じゃ目くじらを立てていまずもの、——顔を見られてしまつてさ……しよびたれていましたよ、はあ。——お前の外聞だつてね、済まなかつた。……誰が教えたの。」

とフフンと笑つて、

「素人だね。」

## 八

「……わざと口数も利かないで、一生懸命に我慢をしていた、御免なさいよ。」  
 声がまた悄しおれて沈んで、

「何にも言わないで、いきなり嘔<sup>かじ</sup>りつきたかったんだけど、澄し返って、悠々と髪を撫<sup>な</sup>着<sup>でつ</sup>けたりなんかして。」

「行場<sup>ゆきば</sup>がないから、熟々<sup>しみじみ</sup>拝見をしましたよ、……眩<sup>まぶ</sup>しい事でございました。」

「雪のようでしょう、ちよつと片膝立てた処なんぞ、千年ものだわね、……染ちやん大分御念入だねなんて、いつもはもつと塗れ、もつと鬘<sup>たば</sup>を出せと云う女房<sup>おかみ</sup>さんが云うんだもの。どう思ったか知らないけれど、大抵こんがらかつたらうと私は思うの。」

そりや成りたけ、よくは見せたいが弱身だつて、その人の見る前じゃあねえ、……察して頂戴。私はお前さんに恥かしかつたわ、お乳なんか。」

と緊<sup>し</sup>められるように胸を圧<sup>おさ</sup>えた、肩が細<sup>ほっそ</sup>りとして重そうなので、俊吉が傘を取る、と忘れたように黙つて放す。

「いいえ、結構でございました、湯あがりの水髪で、薄化粧を颯<sup>さつ</sup>と直したのに、別してはまた緋縮緬<sup>ひぢりめん</sup>のお襦袢<sup>じゆばん</sup>を召した処と来た日にや。」

「あれさ、止<sup>よ</sup>して頂戴……火鉢の処は横町から見通しでしょう、脱ぐにも着るにも、あの、鏡台の前しかないんだもの。……だから、お前さんに壁の方を向いて下さいと云つたじやありませんか。」

「だって、以前は着ものを着たより、その方が多かった人じゃないか、私はちつとも恐れやしないよ。」

「ねえ……ほほほ。……」

笑ってちよつと口籠くちごもって、

「ですがね、こうなると、自分ながら気が変って、お前さんの前だと花嫁も同じことよ。

……何でしたっけね、そら、川柳とかに、下に居て嫁は着てからすつと立ち……」

「お前は学者だよ。」

「似てさ、お前さんに。」

「大きにお世話だ、学者に帯をメ《し》めさせる奴があるもんか、おい、……まだ一人じや結べないかい。」

「人、……芸者の方が、ああするんだわ。」

「勝手にしやがれ。」

「あれ。」

「ちつとやけらあねえ。」

「溝どぶへ落つこちるわねえ。」

「えへん！」

と怒鳴つて擦違いに人が通つた。早や、旧来<sup>もと</sup>た瓦斯<sup>がす</sup>に頬冠<sup>ほおかむ</sup>りした薄青い肩の処が。

「どこだ。」

「一<sup>いち</sup>直<sup>ち</sup>の塀の処だわ。」

直<sup>じ</sup>きその近所であつた。

「座敷はこれだけかね。」

と俊吉は小さな声で。

「もう、一間ありますよ。」

と染次が云う。……通された八畳は、燈<sup>あかり</sup>も明<sup>あかる</sup>し、ぱつとして畳も青い。床には花も活<sup>いか</sup>つ

て。山家を出たような俊吉の目には、博覧会の茶座敷を見るがごとく感じられた。が、入

る時見た、襖<sup>ふすま</sup>一重<sup>ひとえ</sup>が直ぐ上<sup>あがり</sup>、<sup>かまち</sup>框<sup>かまち</sup>兼帯の茶の室で、そこに、髻<sup>まげ</sup>に結<sup>い</sup>つた娑婆<sup>しやば</sup>婆<sup>ば</sup>気<sup>き</sup>なのが、

と膝を占めて構えていたから。

話に雀ほどの声も出せない。

で、もう一間と<sup>みまわ</sup>すと、小庭の縁が折曲りに突当りが板戸になる。……そこが細目にあ

いた中に、月影かと思えたのは、<sup>ひさし</sup>廂<sup>ひさし</sup>に釣つた箱燈籠<sup>はこどうろう</sup>の薄明りで、植込を濃く、むこうへ

ぼかして薄<sup>うっす</sup>りと青い蚊帳<sup>かや</sup>。

ト顔を見合せた。

急に二人は更<sup>あらた</sup>つたのである。

男が真<sup>まんなか</sup>中の卓子台<sup>ちゃぶだい</sup>に、肱<sup>ひじ</sup>を支<sup>つ</sup>いて、

「その後<sup>のち</sup>は。どうしたい。」

「お話にならないの。」

と自棄<sup>やけ</sup>に、おくれ毛を揺<sup>ゆ</sup>つたが、……心配はさせない、と云う姉のような呑<sup>や</sup>込んだ優<sup>やさ</sup>い

微笑<sup>ほほえみ</sup>。

## 九

「失礼な、どうも奥様をお呼立て申しまして済みません。でも、お差向いの処へ、他人が  
出ましてはかえってお妨げ、と存じまして、ねえ、旦那。」

と襖越に待合の女房が云った。

ぴたりと後手<sup>うしろで</sup>にその後を閉めたあとを、もの言わぬ応<sup>うけこたえ</sup>答にちよつと振返つて見て、

そのまま片手に茶道具を盆ごと据えて立直つて、すらりと蹴出しの紅に、明石の裾を曳いた姿は、しとしとと雨垂れが、子持縞の浅黄に通つて、露に活きたように美しかった。

「いや。」

とただ間拍子もなく、女房の言いぐさに返事をする、俊吉の膝へ、衝と膝をのつかかるようにして盆ごと茶碗を出したのである。

茶を充満の吸子が一所に乗つていた。

これは卓子台に載せると可かつた。でなくば、もう少し間を措いて居れば仔細なかつた。もとから芸妓だと離れたろう。前の遊女は、身を寄せるのに馴れた。しかも披露目の日の冷汗を恥じて、俊吉の膝に俯伏した処を、（出ばな。）と呼ばれて立つたのである。

……

お染はもとの座へそうして近々と来て盆ごと出しながら、も一度襖越しに見返つた。名ある女を、こうはいかに、あしらうまい、——奥様と云つたな——膝に縋つた透見をしたか、恥と怨を籠めた瞳は、遊里の二十の張が籠つて、熟と襖に注がれた。

ト見つつ夢のようにうっかりして、なみなみと茶をくんだ朝顔形の茶碗に俊吉が手を掛ける、とコトリと響いたのが胸に通つて、女は盆ごと男が受取つたと思つたらしい。ドン

と落ちると、盆は、ハツと持直そうとする手に引かれて、俊吉の分も浚った茶碗が対。吸き子びしよも共に発奮はすみを打ってお染は肩から胸、両膝かけて、ざっと、ありたけの茶を浴びたのである。

むらむらと立つ白い湯気が、崩る棲つまぐれないの紅の陽炎かげろうのごとく包んで伏せた。  
 うなじ  
 頸うなじを細く、面おもてを背けて、島田を斜ななめに、

「あつ。」と云う。

「火傷やけどはしないか。」と倒れようとするその肩を抱いた。

「どうなさいました。」と女房飛込み、この体ていを一目見るや、

「雑巾々々。」と宙に躍つて、蹴返けかえす裳もすそに刎はねた脚は、ここに魅さした魔まの使つかいが、鴨居かもいを抜けて出るように見えた。

女の袖つけから膝たまへ湛たつて、落葉うずが埋うずんだような茶殻すくを掬すくつて、仰向あおむけた盆の上へ、俊吉がその手の雫しずくを切った時。

「可よござんすよ、可よござんすよ、そうしてお置きなさいまし、今私わたくしが、」

と言いながら白に浅黄へりを縁へりとりの手巾ハンケチで、脇おきを圧おさえると、脇。膝をずぶずぶと圧えりと、膝を、濡れたのが襦袢とを透とおして、明石の縞しまに浸にじんでは、手巾にひたひたと桃色の雫を

染めた。――

「ええ、私あの時の事を思出したの、短刀で、ここを切られた時、」……

と、一年おいて如月きさらぎの雪の夜更けにお染は、俊吉の矢来の奥の二階の置炬燵おきごたつに弱々と凭もたれて語った。

さてその夜は、取って返して、両手に雑巾を持って、待合の女房あしやうが顫ふるれたのに、染次は悄しおれながら、羅うすものの袖を開いて見せて、

「汚点しみになりましたようねえ。」

「まあ、ねえ、どうも。」

と伸上ったり、縮んだり。

「何しろ、脱がなくツちやお前さん、直き乾くだけは乾きますからね……あちらへ来て。

さあ――旦那、奥様のお膚はだを見ますよ、済みませんけれど、貴下あなたが邪慳じゃけんだから仕方が無い。……」

俊吉は黙って横を向いた。



「浴衣と、さあ、お前さん、」

と引立てるようにされて、染次は悄悄と次に出た。……組合の気脉が通つて、待合の女房も、抱主が一張羅を着飾らせた、損を知つて、そんなに手荒にするのである、ああ。

十

「大丈夫よ……大丈夫よ。」

「飛んだ、飛んだ事を……お前、主人にどうするえ。」

「まさか、取つて食おうともしませんから、そんな事より。」

と莞爾した、顔は蒼白かつたが、しかしそれは蚊帳の萌黄が映つたのであつた。

帰る時は、効々しくざつと干したのを端折つて着ていて、男に傘を持たせておいて、

止せと云うに、小雨の中をちよこちよこ走りに自分で俵を雇つて乗せた。

蛇目傘を泥に引傾げ、楫棒を圧えぬばかり、泥除に縋つて小造な女が仰向けに母衣を覗く顔の色白々と、

「お近い内に。」

「……………」

「きつと？」

「むむ。」

「きつとですよ。」

俊吉は黙ってうなずいた。

暗くて見えなかったろう。

「きつとよ。」

「分ったよ。」

「よ可ござんすか。」

「うるさ煩い。」と心にもなく、車夫の手前、宵から心遣いに疲れ果てて、ぐったりして、夏の

雨も寒いまでに身体もからだぞくぞくする かんしゃく癩癩まぎれに云ったのを、気にも掛けず、ほつと

安心したように立直ったと思うと、

「わかいしゅ車 夫さん、はい——……あの車賃は払いましたよ。」

「有るよ。」

「威張つてき、それから少しですが御祝儀。氣をつけて上げて下さいよ、よくねえ、氣をつけて、可ござんすか。」

「大丈夫でございますよ、姉さん。」と楯かじを取った片手に祝儀を頂きながら。

「でも遠いんですもの、道は悪し、それに暗いでしょう。」

「承うけあい合しましたよ。」

「それじゃ、お近いうち。」

影を引切るように衝ひつきと過ぎる車のうしろを、トンと敲たたいたと思うと夜の潮に引残されて染次は残つてしょんぼりと立つ。

車が路を離れた時、母衣の中とて人目も恥じず、俊吉は、ツト両りょう掌てで面おもてを蔽おほうて、はらはらと涙を落した。……

「でも、遠いんですもの、路は悪し、それに暗いでしょう。」

行方も知らず、分れるように思つたのであった。

そのまま等閑なわざりにすべき義理ではないのに、主人にも、女にも、あの羅うすものぐないの償うすものぐないをする用意なしには、忍んでも逢つてはならないと思うのに、あせつてもがいても、半月や一月でその金子かねは出来なかつた。

のみならず、追<sup>おい</sup>縋<sup>すが</sup>つて染次が呼出しの手紙の端に、——明石のしみは、しみ拔屋にても引受け申さず、この上は、くくみ洗いをして、人肌にて暖め乾かし候よりせむ方なしとて、毎日少しづつくくみ洗いたし候ては、おかみさんと私にて毎夜添<sup>そいぶし</sup>臥<sup>ふし</sup>※。夜ごとにかわる何とかより針の筵<sup>むしろ</sup>に候えども、お前さまにお目もうじのなごりと思い候えば、それさえうつつ心に嬉しく懷しく存じ※……

ふくみ洗いで毎晩抱く、あの明石のしみを。行かれるものか、素手で、どうして。

秋の半ばに、住<sup>す</sup>かえた、と云つて、ただそれだけ、上州伊香保から音信<sup>たより</sup>があつた。

やがてくわしく、と云うのが、そのままになつた——今夜なのである。

俊吉は撈<sup>は</sup>取<sup>か</sup>らぬ雪を踏<sup>ふ</sup>しめ踏<sup>ふ</sup>しめ、俵<sup>くるま</sup>を見送られた時を思出すと、傘も忘れて、降る雪に、頭<sup>つむり</sup>を打たせて俯<sup>うつむ</sup>向きながら、義理と不義理と、人目と世間と、言訳なさ<sup>なつか</sup>と可<sup>な</sup>懷<sup>な</sup>しさ、とそこに、見える女の姿に、心は暗<sup>やみ</sup>の目<sup>ぼう</sup>は、として白い雪、睫毛<sup>まつげ</sup>に解<sup>しずく</sup>けるか雪<sup>しずく</sup>が落ちた。

## 十一

「……そういつたわけだもの、ね、……そんなに怨むもんじやない。」

襦袢一重の女の背へ、自分が脱いだ緋の綿入羽織を着せて、その肩に手を置きながら、  
 俊吉は向い合いもせず、置炬燵の同じ隅に凭れていた。

内へ帰ると、一つ躓きながら、框へ上つて、奥に仏壇のある、襖を開けて、そこに行火  
 をして、もう、すやすやと寐た、撫つけの可愛らしい白髪と、裾に解きもののある、女中  
 の夜延とを見て、密とまた閉めて、ずかずかと階子を上ると、障子が閉つて、張合の無さ  
 は、燈にその人の影が見えない。

で、嘘だと思つた。

ここで、トボンと夢が覚めるのであろう、と途中の雪の幻さえ、一斉に消えるような、  
 げつそり気の抜けた思いで、思切つて障子を開けると、更紗を掛けた置炬燵の、しかも机  
 に遠い、縁に向いた暗い中から、と黒髪が揺めいて、寔れたが、白い顔。するりと緋縮  
 緬の肩を抽いたのは夢ではなかったのである。

「どうした。」

と顔を見た。

「こんな、うまい装をして、驚いたでしょう。」  
 と莞爾する。

「驚いた。」

とほつと呼吸して、どつか、と俊吉は、はじめて瀬戸ものの火鉢の縁に坐ったのである。

「ああ、座蒲団はこつち。」

と云う、背中に当てて寝ていたのを、ずらして取ろうとしたのを見て、

「敷いておいで、そつちへ行こう、半分ずつ、」

と俊吉はじめて笑った。……

お染は、上野の停車場から。――深川の親の内へも行かずに――じかづけに車でここへ来たのだと云う。……神楽坂は引上げたが、見る間に深くなる雪に、もう郵便局の急な勾配で呼吸ついて、我慢にも動いてくれない。仕方なしに、あれから路の無い雪を分けて、矢来の中をそつちこつち、窓明りさえ見れば氣兼ねをしいしい、一時ばかり尋ね廻った。持った洋傘も雪に折れたから途中で落したと云う。それは洲崎を出る時に買ったままの。憑きもののようだと、と寂しく笑った。

俊吉は、巾の中を雪に漾う、黒髪のみだれを思った。

女中が、何よりか、と火を入れて炬燵に導いてから、出先へ迎いに出たあとで、冷いだけ思った袖も裾も衣類が濡れたから不氣味で脱いだ、そして蒲団の下へ掛けたと云う。

「何より不気味だね、衣類きものの濡れるのは。……私、聞いても悚然ぞつとする。……済まなかった。  
お染さん。」

女はそこで怨んだ。

帰る途みちすがらも、真実の涙を流した言訳を聞いて、暖い炬燵はだの膚はだのぬくもりに、とけた雪は、齊ひとしく女の瞳に宿った。その時のお染の目は、大く睜おおきみはられて美しかった。

「女中ねえさんは。」

「女中か、私はね、雪でひとりでに涙が出ると、茫ぼ々と何だか赤いじゃないか。引ひっこす擦こすつてみるとお前、つい先へ提ちようちん灯てんが一つ行くんた。やつと、はじめて雪の上に、こぼこぼ下駄のあとの印ついたのが見えたつけ。風は出たし……歩ある行あるき悩なやんだろう。先へ出た女中がまだそこを、うしろの人足ひとあしも聞きつけないで、ふらふらして歩ある行あるいているんだ。追おっつ着くいてね、使つかいがこの使つかいだ、手を曳ひくようにして力をつけて、とぼとぼ遣やりながら炬燵の事も聞いたよ。

しんせつついでだ、酒屋へ寄ってくれ、と云うと、二つ返事で快く引受けたから、図に乗つてもう一つ狐きつね蕎麦そばを誂あつちえた。」

「上州のお客にはちようど可いわね。」

「嫌味を云うなよ。……でも、お前は先から麵類を断つてゐるから、てんのぬきを誂えたぜ。」

「まあ、嬉しい。」

と膝で確りと手を取つて、

「じゃ、あの、この炬燵の上へ盆を乗せて、お銚子をつけて、お前さん、あい、お酌つて、それから私も飲んで。」

と熟と顔を見つゝ、

「願が叶つたわ、私。……一生に一度、お前さん、とそうして、お酒が飲みたかつた。ああ、嬉しい。余り嬉しさに、わなわな震えて、野暮なお酌をすると口惜い。稽古をするわ、私。……ちよつとその小さな掛花活を取つて頂戴。」

「何にする。」

「お銚子を持つ稽古するの。」

「狂人染みた、何だな、お前。」

「よう、後生だから、一度だつて私のいいなり次第になつた事はないじゃありませんか。」  
「はいはい、今夜の処は御意次第。」



そこが地袋で、手が直ぐに、水仙が少しすがれて、摺<sup>ず</sup>つて、危<sup>あやう</sup>く落ちそうに縋<sup>すが</sup>つたのを、密<sup>そつ</sup>と取ると、羽織の肩を媚<sup>なまめ</sup>かしく脱掛けながら、受取ったと思うと留める間もなく、ぐ、と咽喉<sup>のど</sup>を通して一息に仰いで呑んだ。

「まあ、お染。」

「だって、ここが苦しいんですもの、」

と白い指で、わなわなと胸を擦<sup>さ</sup>つた。

「ああ、旨<sup>おい</sup>かった。さあ、お酌。いいえ、毒なものは上げはしません、ちよつと、ただ口をつけて頂戴。花にでも。」

「ままよ。」……構わず呑もうとすると雫<sup>しずく</sup>も無かった。

花を唇につけた時である。

「お酒が来たら、何にも思わないで、嬉しく飲みたい。……私、ほんとに伊香保では、酷<sup>ひど</sup>い、情<sup>なさけ</sup>ない目に逢<sup>あ</sup>つたの。」

お前さんに逢<sup>み</sup>つて、皆忘<sup>みんな</sup>れたいと思うんだから、聞いて頂戴。……伊香保でね——すぐに一人旦那が出来たの。土地の請負師<sup>うけおいし</sup>だって云うのよ、頼みもしないのに無理に引かしてさ、石段の下に景ぶつを出す、射<sup>しやてき</sup>的<sup>てき</sup>の店を拵<sup>こしら</sup>えてさ、そこに円鬘<sup>まるまげ</sup>が居たんですよ。

この寒いのに、単衣ひとえ一つでぶるぶる震えて、あの……千葉の。先の呉服屋が来たんでしよう。可哀相でね、お金子かねを遣つて旅籠屋はたごやを世話するとね、逗留とまりゆうをして帰らないから、旦那は不断女つづねめにかけると狂人きやうがいのような嫉妬やきもちやきだし、相場師ちやうけしと云うのが博徒ばくちやうちでね、命知らずの破落戸なげずものの子分は多し、知れると面倒だから、次の宿しゆくまで、おいでなさいって因果を含めて、……その時止せば可かつたのに、湯に入つたのが悪かつた。……帯を解いたのを見られたでしょう。

——染や、今日はいいい天気だ、裏の山から隅田川かすかが幽かすかに見えるのが、雪晴れの名所なんだ。一所に見ないかつて誘うんですもの。

余り可懐なつかしさに、うっかり雪路ゆきみちを上つたわ。峠のぼの原で、たぶさを取って引倒して、覚えがあらうと、ずるずると引摺ひきずられて、積つた雪が摺すれる枝の、さいかちに手足が裂けて、あの、実の真赤まつかなのを見た時は、針の山に追上げられる雪の峠の亡者か、と思つたんですかね。それから……立樹ゆわに結えられて、……」

「お染。」

「短刀で、こ、こことここを、あっちこっち、ぎらぎら引かれて身体からだ一面に血が流れた時は、……私、その、たらたら流れて胸から乳から伝うのが、渴きの留とまるほど嬉しかった。

莞爾莞爾したわ。何とも言えない可い心持だったんですよ。お前さんに、お前さんに、：

あの時、——一面に染まった事を思出して何とも言えない、いい心持だったの。この襦袢です。斬られたのは、ここだの、ここだの、——

と俊吉の瞋る目に、胸を開くと、手巾を当てた。見ると、顔の色が真蒼になるとともに、垂々と血に染まるのが、溢れて、わななく指を洩れる。

俊吉は突伏した。

血はまだ溢れる、音なき雪のように、ぼたぼたと鳴って留まぬ。

カーンと仏壇のりんが響いた。

「旦那様、旦那様。」

「あ。」

と顔を上げると、誰も居ない。炬燵の上に水仙が落ちて、花活の水が点滴する。

俊吉は、駈下りた。

遠慮して段の下に立った女中が驚きながら、

「あれ、まあ、お銚子がつきましてございますが。」

俊吉は呼吸がはずんで、

「せ、せ、折角だつけ、……客は帰つたよ。」

と見ると、仏壇に灯が点いて、老人が殊勝に坐つて、御法の声。

「……我常住於此 以諸神通力 令顛倒衆生 雖近而不見 衆見我滅度  
がじようじゆうおし いしよじんつうりき りようてんどうしゆじよう  
こうくようしやり げんかいえれんぼ にしよかつごうしん

広供養舍利 咸皆懷戀慕 而生渴仰心……」

白髪に尊き燈火の星、観音、そこにおはします。……駈寄つて、はつと肩を抱いた。

「お祖母さん、どうして今頃御経を誦むの。」

慌てた孫に、従容として見向いて、珠数を片手に、

「あのう、今しがた私が夢にの、美しい女の人のござつての、回向を頼むと言わしつた故

にの、……悉しい事は明日話そう。南無妙法蓮華経。……広供養舍利 咸皆懷戀  
くわ なるみようほうれんげきよう こうくようしやり げんかいえれん

慕 而生渴仰心 衆生既信伏 質直意柔。……」

新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事は、ここには言うまい。俊吉は年紀二十七。

いかほ野やいかほの沼のいかにして

恋しき人をいま一見見む

大正三（一九一四）年一月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 第二菟莚本

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>